

第一声からみえる

知事候補者の「争点化力」

浅野 一弘

『広辞苑』(第六版)で、「第一声」という語を調べてみると、そこには、「ある活動を始めるとき、最初の公の場で発することば」と記されている。

また、『大辞泉』(増補・新装版)にいたっては、「就任のあいさつや選挙演説など、活動の始めに公の場で最初に発せられる言葉」とあり、とりわけ、第一声ということが示されている。こうした傾向はふるくからあり、たとえば、一九二三(大正一二)年四月二三日の新聞紙上には、すでに、「地方選挙の前に政友會の第一聲 選挙権擴張を叫んだ決議條項」との見出しがみられる。このような状況は、現在においてもあまり、第一八回統一自治体選挙をめぐる報道でも、知事選挙に出馬した候補者の第一声がとりあげられていた。

では、ここで、二〇一五年三月二六日の北海道知事選挙告示日における二人の候補の第一声の一部を紹介したい。

A 候補 「太陽光、風力、バイオマス、地熱。ありとあらゆる再生可能エネルギーを、北海道はどの県よりもいっぱい可能性を秘

めております。だからこそ、わたくしたちは、この北海道におけるエネルギー政策として、原発に依存をしない北海道をめざしていく。」

B 候補 「ひとたび、福島のようなことがありますと、北海道は一次産業、観光産業壊滅。わたしたちの命、いや子どもたちの命、またその子どもたちの命も危ういのであります。北海道は、豊かに、心豊かに生きるとき、原発はもういらなと思うのであります」

上記の二候補の第一声を聞いて、おのおの、いずれが、高橋はるみ、佐藤のりゆきの発言であるのかを判別することは容易ではない。ここで、主張したいのは、有権者は、この第一声を聞いたかぎりでは、両候補ともに、脱原発のスタンスをとっているとの印象を受けるといふことである。要するに、両候補の第一声からは、原発問題に対する明確なスタンスのちがいがみてとれないというわけだ。このことは、「今回の知事選は脱原発か原発かの道民投票の性格もある」と主張してきた、

佐藤の「争点化力」の弱さを意味しているといってもよからう。

第一声の時間配分

それは、両候補の第一声の時間配分からもいえる。具体的には、A候補は、挨拶三五秒(9.3%)、出馬理由八一秒(21.6%)、観光振興五四秒(14.4%)、医療・福祉七五秒(20.0%)、札幌との連携三〇秒(8.0%)、五輪誘致一五秒(4.0%)、エネルギー四五秒(12.0%)、選挙戦の決意四〇秒(10.6%)となっていた。他方のB候補のほうは、挨拶二〇秒(2.2%)、出馬理由三一〇秒(34.8%)、人口減少一七〇秒(19.1%)、医療・福祉一二〇秒(13.5%)、エネルギー一〇〇秒(11.2%)、知事像一一〇秒(12.3%)、選挙戦の決意六二秒(7.0%)となっていた(集計 札幌テレビ放送(STV)。四捨五入の関係で、一〇〇%とはならない)。

ここで、エネルギー(原発)問題にさいした時間配分だけに着目すると、A候補の場合は12.0%で、B候補のほうは11.2%という数値が得られる。ということは、告示まえの三月一八日に実施された、公開討論会(主催 北海道新聞社)の席において、「原発について、知事の姿勢が理解しかねます。再稼働はどうしますか。本音を聞かせてください」と、厳しい調子で高橋にせまった佐藤はA候補であり、他方、「再稼働は、これだけの重要な政策課題を今、予断を持ってイエスともノーとも言うべきではない」との玉虫色の姿勢に終始した高橋はB候補と考えるのがふつうである

う。⁴

しかし、じつは、エネルギー（原発）問題に多くの割合をさいたほう（＝A）が、高橋なのである。そのうえ、高橋のトータルの演説時間はわずか六分一五秒でしかなかったものの、佐藤のほうはその倍以上の一四分五二秒をついやしていた。そのため、佐藤の第一声は、きわめて冗長な印象をあてた。しかも、エネルギー（原発）問題にさいた時間も十分ではなかったことから、原発問題を争点化させるどころか、皮肉にも、埋没化させるようなかたちとなってしまうのである。告示日当日正午まえの北海道内のテレビ・ニュースでは、各局ともに、知事選挙の争点の一つは、泊原発再稼働の是非と報じていた。にもかかわらず、佐藤は、「泊」という固有名詞を一度もつかうことなく、第一声を終えたのであった。

無党派層の動向

そのためであろうか、四月一二日の投票では、佐藤は一一四万六五七票と善戦したものの、高橋の一四九万六九一五票をうわまわることにはできなかった。では、佐藤の敗因はどこにあるのだろうか。北海道新聞社の出口調査によれば、前回の知事選挙（二〇一一年四月一〇日）では、無党派層のじつに68・2%が高橋に票を投じていた（木村俊昭19・9%、宮内聡6・8%、鯉谷忠4・5%、その他0・6%）。⁵ところが、今回の選挙で、高橋は無党派層の49・7%の票しかあつめきれず、50・0%の支持をあつめた佐藤にリードを許しているのである（無回答0・3%）。⁶無党派

での支持において、佐藤が、高橋をうわまわったという結果は、STV・読売新聞社による出口調査でも得られた（佐藤52・54%、高橋44・96%、無回答2・5%）。

これらの数字は、「のりゆきのトークDE北海道」というテレビ番組をおよそ一八年間つづけてきた佐藤の知名度のたかさを物語るものである。だが、佐藤の知名度のたかさにくわえて、「争点化力」がともなっていれば、さらなる無党派層の票のうわづみが可能であったような気がしてならない。この「争点化力」がよわかったからこそ、「投票で重視した政策は？」との問いで、「エネルギー」を選択する有権者がわずか9・13%しか存在しなかったとみてよからう（「景気・雇用」22・02%、「医療・福祉」15・01%、「行政改革」11・72%、「第一次産業」2・69%、「その他」33・63%）。もつとも、このSTV・読売新聞社による出口調査では、「少子化」をえらんだ者は5・80%で、「人口減少・危機突破戦略」を公約でかけた高橋も「争点化力」にかけていたといえなくもない。とはいえ、両候補ともに、「争点化力」におとつているということになると、最終的には、現職のつよみを發揮した高橋にぶがあることは明白である。

二〇一九年知事選挙はじまっている

ところで、高橋を推薦した、「公明党道本部」稲津久代表は佐藤氏が北海道電力泊原発の再稼働の是非を争点に掲げたことに言及し、「道民の期待は（高橋氏が掲げた）経済活性化や地域振興に

あった」と指摘した⁷という。だが、STV・読売新聞社による出口調査では、「景気・雇用政策を重視」した回答者のうちの59・36%しか、高橋は票をかためきれない（佐藤39・45%）。

ということは、ひとたび、原子力発電所の事故が発生すると、「景気・雇用」がどれほど深刻化するかを説くことに成功していたならば、佐藤は、さらなる票のうわづみができたのかもしれない。換言すれば、泊原発再稼働反対を明確に争点化し、有権者に対して、この問題をめぐる高橋の「ほんとうの顔」をみせつけることができたならば、選挙戦での勝利も不可能ではなかったはずだ。

四年後の知事選挙は、もうスタートしている。いまから四年後をみすえて、「争点化力」をもつた候補をリクルートしていくことが、挑戦者側に求められていることはいままでもない。

↑あさの かずひろ・札幌大学法学部教授

【注】

- (1) 『読売新聞』一九一三年四月二三日、二面。
- (2) <http://satoriyuki.jp/news/a5%b0e%a1%e7%a4%bc/>（二〇一五年六月五日）。
- (3) 『北海道新聞』二〇一五年三月二〇日、九面。
- (4) 同右、八面。
- (5) 同右、二〇一一年四月一日、七面。
- (6) 同右、二〇一五年四月二三日、四面。
- (7) 「新・北海道ビジョン―世界に発信！輝く北海道―」（二〇一五年三月）（<http://hanuchan.jp/manifesto-manifest-pdf/seisaku2015.pdf>）（二〇一五年六月五日））、四頁。
- (8) 『北海道新聞』二〇一五年四月一三日、三頁。